

泉陽会公開講座のご報告

テーマ「大阪湾の海の生物」

——講師：鍋島靖信氏 ——

(昭和 47 年卒・24 期生)



- 開催日時：令和 6 年 6 月 8 日（土）午後 3 時～4 時 30 分
- 開催場所：泉陽会館 2 階 集会室
- 参加者数；45 名

鍋島靖信氏のプロフィール

- 1972 年 大阪府立泉陽高等学校卒業
- 1973 年 三重大学水産学部入学
- 2016 年 大阪海区漁業調整委員会専門委員
大阪湾見守りネット運営委員
大阪市立自然史博物館友の会会長・外来研究員

講演内容

- ・2023 年 1 月淀川に來遊したマッコウクジラの海洋投棄までの顛末
- ・岬町に 8 年定住するハンドウイルカ親子におきた重大事件
- ・魯山人が堺沖が旨いと褒めたアナゴの激減と生態
- ・温暖化により大阪湾に出現した大型サメ類や南方生物など、
- ・これまで大阪湾でみられた海の生物の話し

お礼と感想

- 鍋島講師の出身・泉陽高校・昭和 47 年卒業 24 期の同窓生の方のご協力有難うございました。 —泉陽会役員—
- 京都からの参加者の感想
「鍋島講師のお話を一度聞きたかった。
今回の講演会に参加し、お話を聞くことができ、
更に感激しました」と感想をのべて下さいました。

温暖化による大阪湾・瀬戸内海の水産物の変化

「近年、水温上昇により大阪湾・瀬戸内海の生物の種類や量に大きな変化が見られます。水産試験場に着任以来、大阪湾に出現する生物や現象を記録し、漁況調査に長く関わってきた経験をもとに、過去・現在の水産生物の変化について紹介します。」
ということで、お話をいただきました。

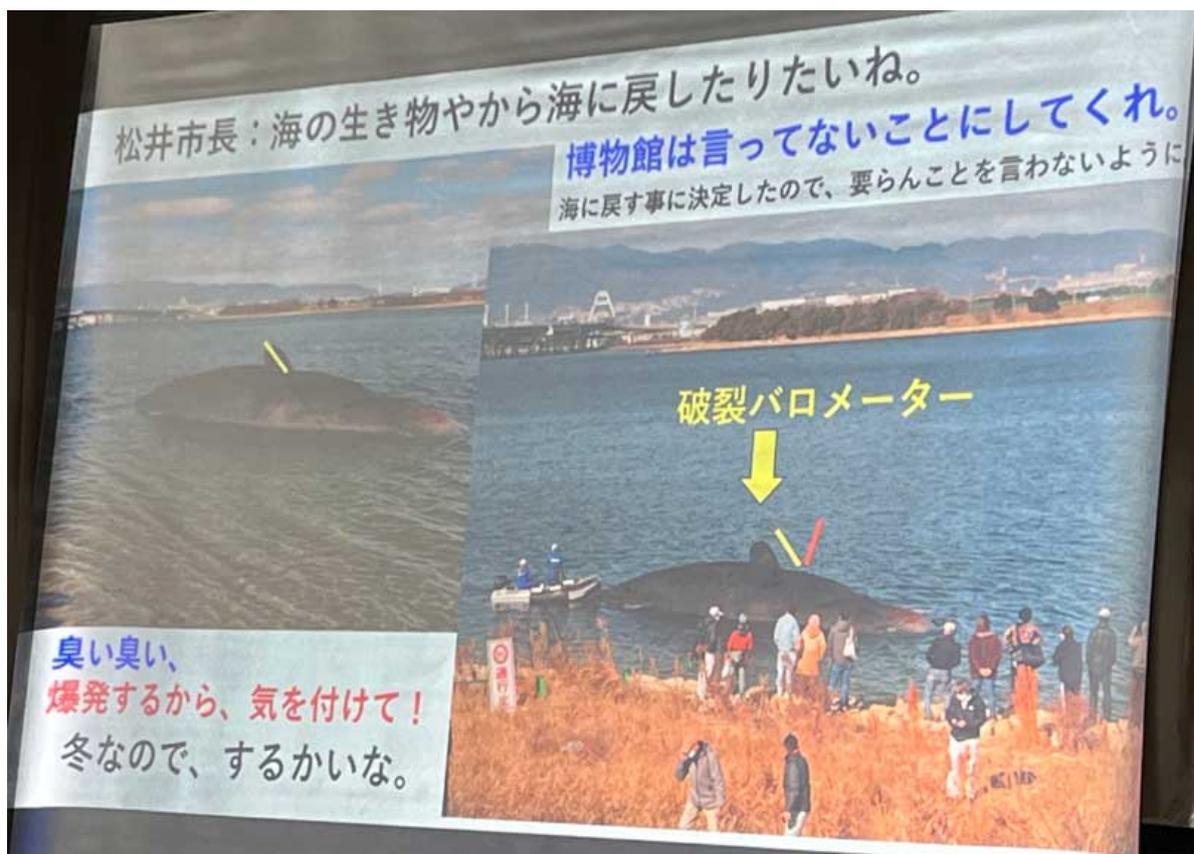


子どもの頃の生き立ちから、なぜ生き物関係の仕事に就いたのかのお話しに始まり、大阪湾の水温の変化に伴い生き物の変化について多くのトピックスのお話をさせていただきましたが、その中で印象に残ったトピックスを以下にお伝えします。



淀川のクジラ『淀ちゃん』の軌跡：壮絶な漂流と悲劇的な最期

- 2023年1月、大阪湾の淀川河口付近に、体長約15メートルのマッコウクジラが入り込みました。時折潮を吹く姿がメディアで取り上げられ、「淀ちゃん」と呼ばれて親しまれたが、大阪湾から出られないまま数日で死んでしまいました。
- 淀ちゃんは深海に住むマッコウクジラで、その頭部には大量の油が詰まっており、それを使って獲物を気絶させて捕食します。
- マッコウクジラは通常、深海に生息し、大阪湾のような浅瀬に現れることは稀です。そのため、淀ちゃんは負傷し、体力を消耗して浅瀬に流れ着いたと考えられました。発見後、クジラの息遣いが徐々に短くなり、最終的には息をしなくなりました。淀ちゃんは負傷と低体温症で死亡したと推測されています。
- 淀ちゃんの悲劇は、温暖化による黒潮の変化や船との衝突が原因とされています。最期の暴れたシーンを目撃した人々は、その姿に心を痛めました。



◎岬町に8年定住するハンドウイルカ親子におきた重大事件

(読売新聞令和5年12月6日掲載)

●日本各地の沿岸に近年、野生のミナミハンドウイルカが定着し始めている。
10月21日大阪府岬町の河口に体長1.2メートルの死骸が打ち上げられているのが見つかった。船のスクリューに体を切られ、衰弱死したとみられる。

●気象庁によると、日本近海の平均海面水温は22年までの百年間1.24度上昇。
大阪湾のイルカに詳しい大阪府立環境農林水産総合研究所の鍋島靖信・元主任は「大阪湾にもイルカが定着したのは温暖化の影響もあるだろう。」と指摘する。

●鍋島講師「ルカちゃん」と対面する

「もう最後にイルカだけちょっと話して終わりにしたい」ということで、ルカちゃんの話をしていただきました。



●1994年以降、大阪湾でイルカが頻繁に見られるようになった。特にハンドウイルカやハセイルカが何度も目撃され、地元漁師との交流が増えている。2015年には熊本生まれのハンドウイルカが大阪湾に定住し、地元で「ルカちゃん」と名付けられた。このイルカは負傷したが、巧みに生き延び、地元住民や漁師の支援を受けて回復した。その後、子供を連れて泳ぐ姿も目撃されたが、子供は不幸にも死んでしまった。漁師たちとの触れ合いや観光船とのトラブルもあったが、ルカちゃんは大坂湾での生活を続けている。

◎イカナゴ激減！温暖化が大阪湾の食卓を直撃！

●私達の食生活に直接関係する大阪湾から消滅しそうな「イカナゴ」についての水揚げ量の推移と生態について報告します。

●「くぎ煮」と呼ばれるつくだ煮で知られるイカナゴは、兵庫県の播磨灘や大阪湾が国内有数の漁場となっていますが、近年、深刻な不漁が続いています

●イカナゴの漁獲量の変動は大きく、1994年以降漁獲が低迷し数千トンから1万トン程度で推移していたが、2018年以降急激に減少し、2020年および2021年の漁獲量はゼロ、2022年はわずか35トンの漁獲量となった。

2016年は温かったので47トンしか取れなかった

2017年は75トンまで取れた。

2020年は8トン、2021年57トン

2023年106トン、2024年に調べたら、親も卵も少ない

2億匹親を残すと、7000トンとか取れる可能性がある。



●大阪湾のイカナゴが激減している原因についてのお話です。イカナゴは温暖な気候に適応しきれず、夏の高温に耐えられないため、砂の中に潜って活動を止めます。

近年の温暖化により、砂中で休む期間が長くなり、餌を食べる時間が短くなったことで栄養不足になり、卵の数が減少しています。1994年以降、大阪湾を含む日本全体でイカナゴの漁獲量が減少し、2023年にはほとんど捕れなくなってしまいました。

漁師たちは今年の漁を休む決断をし、温暖化の影響が明確に表れています。

◎「お話を聞かせて頂いた感想」

—————自然に戻ることの大切さ—————

●イカナゴ、ハンドウイルカ、マッコウクジラを主なテーマに一講座が展開されました。

マッコウクジラの死にゆく様は映像では感じなかったが、鍋島講師さんからの説明で、少し悲しみがこみ上げてきました。

鍋島講師さんルカちゃんとお友達だったかと思うほどやさしく対話をしている光景が目につかれます。

●私達の日常の食卓にある「イカナゴ」も温暖化でたしなむことができないとのことです。60年以上も昔、母の故郷・宇和島から、新鮮な魚（主にジャコ）を送ってもらったことが脳裡に浮かんできます。

自然のままを口にすることの大切さを痛感しております。

●鍋島講師さんがマッコウクジラの「海洋投棄」を決めるについてクジラの保護者即ち大阪府庁とのやりとりを語って下さいました。

語られる内容がリアルなあまり、参加者のみなさんから思わず笑いがとびだしてきました。久しぶりに笑うことができました。

日常生活に大切なお話、鍋島講師さんありがとうございました。

（昭和 37 年 14 期 ； 林 昌子）



（編集・纏め：組織委員会 昭和 50 年 27 期：川端 満）